

聖書：ルカの福音書 1：26～38

説教題：おことばどおり、この身に

日時：2020年12月20日（クリスマス記念朝拝）

今日の箇所は一般に「受胎告知」と呼ばれる箇所です。御使いがマリアに現れて「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」と告げます。このマリアはどんな人だったのでしょうか。27節に彼女は「ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけ」とあります。つまり彼女は婚約中の女性でした。当時、ユダヤで女性は一般に12～3歳で婚約したようです。そして約一年間の婚約期間を経た後、正式な結婚へと至ります。それまでは夫婦と認められつつも、一緒の家には住みません。やがての結婚に向けて準備をする期間でした。そんな彼女に御使いが「おめでとう」と告げます。マリアはひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込みます。そして御使いが告げたことは、マリアはみごもって男の子を生むということでした。その名をイエスと付けなさいと御使いは言います。イエスとはヘブル語のヨシュアに相当し、主は救いという意味です。果たして生まれてくる子はどんな子なのでしょう。その後で述べられていることを一言で言えば、それは神の子ということでした。マリアの胎から誕生する赤子は神ご自身であられる。これこそクリスマスの驚くべき第一のメッセージです。

どんな人でもその誕生は基本的に喜ばしいものです。赤ちゃんが生まれると分かったら、あるいは生まれた時に、多くの人はおめでとう！と言って喜びます。また毎年誕生日が来るごとに、その日を記念してお祝いします。しかしです。どんなに偉大な人でも、その誕生日がいつまでも祝われることはないのではないのでしょうか。たとえば皆さんは、どんな偉人でもいいですが、その誕生日を知っているという偉人が何人いるのでしょうか。たとえ一人二人知っていたとしても、世界の多くの人がその日を祝うということはまずありません。しかしここに毎年、世界中で祝われている人がいます。なぜクリスマスはそうなのでしょう。それはクリスマスは神がこの世に人として生まれた日だからです。

ここにまずクリスマスの素晴らしいメッセージがあると思います。聖書によると、人間は神に対して罪を犯し、神から離れてしまった者たちでした。自分自身が神のようになろうとして墮落し、神との交わりを失い、神から流れて来るあらゆる祝福

を失いました。そのままでは本当の光はなく、将来も希望もない状態です。しかしこのクリスマスは神が私たちのところに来てくださった！という出来事です。神はこの世界と私たちを見捨てておられないことがここに証しされています。ここに私たちにとって大いなる慰めまた希望があります。ここに他のどんな人の場合とも違って、イエス様の誕生がいつまでも祝われるべき理由があるわけです。

さてその神の御子を宿す母として選ばれた人はどんな人だったでしょう。その母となるマリアについて、26 節に「ガリラヤのナザレという町の一人の処女」とあります。普通私たちが考えるなら、神の御子が誕生する場所としてどこを選ぶでしょうか。やはりイスラエルなら、その宗教の中心地エルサレムではないでしょうか。そこに住む立派な家柄の人、王家、あるいは特別な宗教家の家に。しかし御使いが遣わされて向かったのは何とガリラヤのナザレという町でした。中央からは見下されていた地域です。しかもそこで選ばれたマリアは特別な教養を持った人ではありません。彼女は、このあとヨセフと結婚しますが、二人の生活は貧しかったことが聖書から分かります。まだ 10 代の少女です。人間的に考えれば、全然重要とは思われない一人の田舎娘にしか過ぎませんでした。しかしここにキリスト教の救いがすべての人に差し向けられていることが示されているわけです。もしイエス様が王の宮殿やエルサレムで高い教育を受けた人の家に生まれていたら、神の救いはそういう特別な人たち向けのものと思われたでしょう。しかしイエス様はガリラヤのナザレの一人の処女の胎に宿られました。そしてそんな彼女から生まれたということは、その後も貧しい環境で育ったことを意味します。ですからこの世の繁栄や名声から程遠いところで生活しているどんな人も、このイエス様の誕生を自分と関係づけて考えることができるのです。そのメッセージをしっかり受け止めたいのです。

しかしです。マリアにとって御使いの告知はあまりにも受け止めにくいものだったと思います。どうしてそのようなことが起こるのでしょうとマリアは 34 節で御使いに問います。「私は男の人を知りませんのに」と。日本語では少し分かりにくいのですが、彼女はここで「信じられません！」という意味で、この言葉を発したのではなかったようです。そのことは今日の箇所の前に出て来るザカリヤと比較すると分かります。ザカリヤは御使いの告知を信じなかったために、しばらくの間、口がきけなくなりました。マリアにはそのようなことはありません。ですから彼女の「どうしてそのようなことが起こるのでしょう」という問いは、「そんなことはと

でも信じられません！」という意味ではなく、むしろ彼女は信じた上で、「どのようにしてそのことが実現するのでしょうか」と、さらなる説明を求めたということになります。それに答えて、ここにいわゆる処女降誕の神秘が語られることとなります。35 節：「御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」

多くの人はこの聖書の教えにつまづきます。まさかクリスチャンはこのことを本気で信じているのではないでしょうね？と。確かにこれは人間の頭では考えられないことです。イエス様の場合を除いて世界では一度も起こったことはありません。今日の人々は真理は繰り返し実験によって証明されると考えています。繰り返し検証して確かめられないことは信じるに値しないと。しかしこの処女降誕は繰り返し起こるかどうかによって確認できるようなことではなく、歴史でただ一回限り起こった独特な出来事です。その出来事において神が特別なメッセージを語っておられるわけです。

まずこの処女降誕にはイエス様の誕生が神からの特別なプレゼントであることが示されています。もし通常の人間の男女の性の営みを通して、この子どもが生まれたとするなら、その子は人間の活動を通して生まれ出た子になります。いわば人間活動の産物です。しかしこの処女降誕では人間の行いが排除されています。神にしかできない形で、このことが起こりました。ここにマリアの胎から生まれる方は神からの一方的なプレゼント、一方的な贈り物であることが明らかに示されています。このあまりに不思議な神のみわざを受け止めるために、36 節で御使いは親類のエリサベツが子を宿していることについて触れます。彼女は高齢で、これまで不妊だった人でした。確かにマリアとエリサベツは違います。片方は通常の出産の方法により、片方はそうではありません。しかし人間の思いをはるかに超える形で神が働くことができるという点では同じです。そこで御使いは 37 節でこう言ってマリアを励まします。「神にとって不可能なことは何もあります。」 確かにそうです。不可能なことがあるなら、それは神ではありません。神には何でもできます。神にできないことは何もあります。

ではなぜ神はイエス様の誕生においては、この処女降誕という方法を取られたのでしょうか。それは一言で言えば、イエス様が罪のない完全に聖い人間として生ま

れるためでした。もしイエス様が通常の方法で生まれるなら、イエス様は罪人になってしまいます。罪人と罪人から生まれて来る子はみな罪人です。それでは救い主になれません。しかしある人は言うかもしれません。結局マリアの胎から出て来たなら、マリア人は罪人なのだから、その子も罪人になるのではないかと。しかし35節に「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます」とあります。この「おおう」という言葉は、創世記1章2節の天地創造において、神の霊すなわち聖霊が、その上を動いていた、あるいはおおっていたというあの行動を彷彿とさせる言葉です。あの時のような聖霊の慎重な守りと導きによって、生まれ出る子は罪から守られた聖い方として誕生すると言われています。ある人はそれだったら何もマリアを通さずに、神が新しく罪のない人間を造って送ってくだされば良かったのではないかと言うかもしれません。しかしもしそんなことをしたら、それは私たちとは関係のない別種の人間になってしまいます。人類はアダムとエバの子孫として、みな一つにつながっています。その私たちの救いのためには私たちと同じ人間から生まれ出て来る必要がありました。ですから同じ罪人の一人の胎から生まれることが必要でした。しかし聖霊が奇しく臨んだことによって、イエス様は私たちと同じ人間性を持ちつつ、あらゆる罪の染みから守られた「聖い方」として生まれることができたというのが聖書の説明です。

ここに私たちにとっての大きな慰めと希望のメッセージがあります。イエス様は罪のない方です。イエス様だけがそのようなお方です。そしてイエス様はそのような方であられるので私たちの救い主になることができるのです。その聖いご自身の上に、私たちの罪を担うことによってです。もしイエス様に幾らかでも罪があったら、そのことはできません。またイエス様がただの人間だったら一人分の罪しか担えません。しかしイエス様は聖なる神の御子であられるので、無限に多くの人を救い出すことができるのです。イエス様は私たちの罪をすべて聖なるご自身の上に引き受け、やがて十字架上で身代わりに死んでくださることによって、ご自身により頼む全ての人を救い出すことができるのです。このことを信じる時、私たちは初めて自分の人生を本当の意味で肯定し、喜ぶことができます。今、自分の人生が罪のためにどんなに暗く、悲しみうめくようなものであっても、自暴自棄にならなくていい。聖なるイエス様が私の罪をすべて引き受け、この罪の問題を解決してください。その恵みにあずかった私たちは、この与えられた人生を本来の神の祝福のもとにあるものとして新しく感謝して受け止めることができるのです。地上にあっ

て日々罪を犯して悩んでも、それを解決してくださる救い主がおられます。そして最後のさばきの日にも、イエス様により頼んで平安を持って神の前に立つことができるのです。

最後に38節のマリアの応答について見たいと思います。38節:「マリアは言った。『ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。』すると、御使いは彼女から去って行った。」マリアの言葉は驚くべきものではないでしょうか。自分がマリアの立場だったらどうかと考えてみてください。おことばどおり、この身になるとは、婚約中の自分の胎にいのちが宿るということです。そのお腹が大きくなったらどうなることか。彼女は社会から姦淫の罪を犯したと見られ、ユダヤの律法によって石打ちの刑に処される危険があります。当時、実際にそれが執行されることは皆無だったようですが、いつそうされてもおかしくない状態に置かれることになります。そして何と云ってもヨセフとの関係はどうなるのでしょうか。彼女はこの御心に従う結果、愛する彼を失うかもしれません。実際、ヨセフはマリアのお腹が大きくなっていることを発見して、離縁しようと考えたことがマタイの福音書に記されています。このように神のおことばに従うことは非常に困難な道を行くこと、非常に危険な道を行くことでした。ところが彼女は「おことばどおりに、この身に」と答えました。彼女はこうして神に信頼して従う道を選び取ったのです。自分の頭で考えれば難しいことばかりです。自分が準備して来たことや、自分の願い、自分の計画とは違う方向に行くことになります。それらを一旦手放さなければなりません。しかし彼女は、神は良い方であると信じました。私の小さな頭で考えれば難しいことばかりではあるが、神に不可能はない。そう信じて彼女は神に従う道を優先して選び、この後のことは神に委ねました。そうしてこの道を進むことによって、彼女は確かに御使いに最初に言われたように「恵まれた方」、神に祝される人となって行ったのです。

私たちもこのマリアのように神の恵みに答える者でありたいと思います。この後、信仰告白式が行われます。兄弟がしようとしていることは、このマリアの告白と同じです。神が差し出してくださっている恵みはある意味で信じられないようなことです。処女降誕をはじめ理解するのが難しいことは色々あります。また自分の罪がこちらにあって赦されるということもあまりに不思議です。しかし信仰告白することとは、神の恵みに対して「どうぞおことばどおり、この身になりますように」

とお答えすることです。その神の恵みの下に自分を置くことです。そうする人に神の約束と祝福は実現します。

そしてその後の信仰生活も同じです。地上にあって私たちは色々な困難にぶち当たります。信仰を持てばすべてがバラ色に変わるわけではありません。仕事のことで大きな問題が生じるかもしれません。経済的なことや健康のことで困難が生じるかもしれません。あるいは家族の関係において、愛する人との関係において、難しいことが色々起こってくるでしょう。そういった色々な場面で大事なことは「神にとって不可能なことは何もない」と信じつつ、「どうぞあなたのおことばどおり、この身になりますように」と神の御言葉に従う道を優先して選ぶことです。自分の願いや計画を上を持って来て、それを主になさってくださいとごり押しするのではなく、むしろ「私の願いではなく、あなたの御心をなさってください」と祈り、神が御言葉において命じている道を選んで進むことです。それは人間的に考えれば一見すべてを失うことのようにも見えるかもしれませんが、実は主が用意された最善に生きる道です。その道を行く時に、「神にとって不可能なことは何もない」という奇しい恵みを私たちは体験させていただく者となります。マリアはその道を選び取って進み、神の恵みを豊かに経験する「恵まれた方」となりました。私たちもクリスマスの恵みを感謝して、私の願いではなく、「あなたのおことばどおり、この身に」と告白して主に従い、神が備えてくださった真の祝福の道、救いの道を喜びを持って進む者へ導かれて行きたいと思います。